

市民が誰でも学び得る場に

土橋信男・函館大教授(元札幌市教育長)が提言

政令指定都市の「意地」とでも言うのだろうか、「札幌市立大学」構想が実現に向けて進みつつある。だが、その目指す像は、いまひとつ見えてこない。昨年、市教育長を志半ばで辞した土橋信男・函館大教授は、「市民のための大学」にその意義を見いだそうとする。

無視された重い提言

本誌の5月号に「なぜいま札幌に市立大学か」という記事が掲載された。厳しい財政事情の中、また少子化が進み大学間での学生獲得競争がますます激しくなっているこの時期になぜ大学が必要なのか、そしてその大学は果たして札幌市の産業振興に貢献できるのか、というのがその趣旨であった。

いるような市立大学であれば、市民の税金を賢く使うことにはならず、将来に禍根を残すことになると思う。大学化検討懇話会の特別委員であった全国の大学事情に最も詳しい天野郁夫・元東京大学教育学部長は、一昨年十一月に行われた大学化のための最初の市民フォーラムの基調講演で、遅すぎた札幌市の大学づくりは単なる再編や昇格では話にならない、と的確に指摘されたにも拘わらず、これまでの大学づくりの構想

は、まさに高等専門学校と高等看護学院の格上げと再編にしか過ぎない最初からの貧しい大学づくりの構想から一歩も抜け出でていない。天野委員は続けて前向きに指摘もされた。すなわち、遅いということを生かすには、「新しいアイデアに満ちた大学をつくるチャンスとして活用されるべき」で、「その新しい大学というのは、多分『市民の、市民による、市民のための大学』というものではないか」と述べて、「そ

のためには、五年や十年といわず、二十年、三十年を見通した大学のありかたというものを設計していただくとい」と進言されていたのである。まさにわが意を得た助言であったと思つたのだが、どういうわけかこの助言や進言は大学化検討懇話会の中では取り入れられていなかった。特別委員の最も貴重な提言はまったく無視されたのである。何のための特別委員だったのか。

次項に述べるように、まさに市民のための大学こそが新しい大学でなければならぬ、というものであり、私の念頭には当時進行していた札幌市の大学づくりがあり、参考にしていたきたいという願いもあった。本誌がこの問題を取りあげ、また新しい市長も誕生したところでもあるので、私の大学構想を以下に提示して新市長にはこの問題を新しく真剣に考えていただきたい。私は、以下に述べるような大学こそが天野氏の貴重な提言にもあるような、新しい二十一世紀のための大学だと確信しているものである。

生涯学習実現できる

結論から述べたい。私の構想する大学は、成人である札幌市の市民の誰でもが自分を豊かに成長させるために学べる大学である。この大学は市民の誰でもが自分が学び得る大学であるので、それを「おらが大学」として愛し、誇りに思える大学である。



どばし・のぶお 1936年(昭和11年)3月16日生まれ。国際基督教大教養学部卒業。同大助手を経て、米国シラキュース大大学院に進み、同大助手。75年に北星学園大助教授、80年に同大教授。93年から2000年まで同大校長。01年4月に民間人初の札幌市教育長に就任したが、任期半ばの02年6月に辞任した。

この大学は、生涯学習を可能にする大学として構想するのである。そうすれば、札幌市民の非常に多くがこの大学で学び、知的・人格的に成長・発達し、あるいは新たな職業技術を身につけて、より良い札幌をつくっていくことに貢献できるのではないかと思う。

日本には、市民の誰でもが入学できる大学はまだない。

しかし、米国では二年制の公立大学であるコミュニティカレッジがこうした市民要求に応じて、十八歳以上の

入学希望者を学生として受け入れている。

わが国では、この事実はありません。つまり知られていないが、米国で最も多くの大学生がコミュニティカレッジで学び、教養を身につけて、あるいは職業技術を身につけているのであり、これが米国市民の教育要求を支える力となり、また米国社会を支える力となっているのである。

わが国で、こうした要求に答えているのは大学ではなく、教養に関してはカルチャー教室であり、そして職業に関する

ては専門学校である。

大学は専門学校や、カルチャー教室とは違うという反論も出るであろうが、では大学はそれらとどう違うのであろうか。

たしかに、これまでの大学は違っていたかも知れないが、生涯学習の時代の大学は、そうした市民要求に答える使命や責任があるのではなからうか。

勿論、大学であるからには、大学としてのレベルを必要とするので、カルチャー教室や専門学校をすべて大学に置き

換えるということの意味しているのではない。しかし、市民のそうした学習要求に答える役割を新しい大学は担うべきではなからうか。

街中をキャンパスに

これまでに発表された市立大学の構想は、市立高等専門学校と、高等看護学院を格上げして、それぞれを学部とする二学部からなる大学構想である。

この二つの学部は、それぞれに地域の必要性に答えるために必要であるので、この構想には私は異論はなく賛成である。それは、札幌市の悲願でもあるからである。

私の提案は、前述のような生涯学習を可能にする新しい学部を、これら二つの学部に加えて、というよりも、むしろそれを市立大学の中心的な学部として開設することである。

この学部は、仮に市民生涯学習学部とも名づけることができよう。近年いくつかの大学が生涯学習という言葉で学部をつくっている。

この学部は市の中心につくべきだが、同時に札幌が有しているあらゆる文化的施設や財産を活用して学びの場にする。また、札幌市内や近郊にある道の施設も、道と連携して利用可能をはかる。

生涯学習総合センター「ちえりあ」、中央図書館などの図書館、音楽ホール「キタラ」、文学館、文化資料室、芸術の森彫刻公園、本郷新彫刻美術館、青少年科学館、近代美術館、ウインタースポーツ博物館、開拓記念館など文学・美術・音楽・スポーツに関する教育文化施設を教育の場としてフルに活用するのである。いわば街中を大学のキャンパスにするのである。そのことによつて、貴重な財産であるそれらの施設が生きて用いられ、市民もまた豊かな学びの場を得られるのである。

札幌は、札幌農学校の所在地であり、近代日本の高等教育の発祥の地である。

二十一世紀の高等教育の新しいあり方を札幌から発信したいものである。(寄稿)